
夏の卒業式

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の卒業式

【Zコード】

Z8126E

【作者名】

佳生

【あらすじ】

夏の卒業式。タイムカプセルに未来を託した子ども達と、託せず
に大人になった僕の物語。

別に、授業中に眠ってしまう事に抵抗はなかつた。だから、教室で田が覚める事にも驚きはしない。

「崎速くん……起きないと」

「あ……はい。うん……分かつた」

僕を起こしてくれたのは、隣の席の女の子。名前は確か、杉表幸ちゃん。長い髪を両肩から前に持つてきていて、ゆるく三つ編みにして下げている。優しそうな表情で微笑んでいる彼女に返事をして、僕はゆっくりと体を起こす。

一瞬視界が霞んだから、僕は寝ぼけ眼をこする。

皆黒板の方を向いて、クラスのリーダーの島垣善樹の進行のもと、何かを話し合っている。黒板の端の方に、大きく、小学生にしては上手い字で、こうか書いてあつた。

『卒業に向けて』

そんな時期になつたのかと思った僕だけども、窓の外を見てみると、木の緑がとても鮮やかで、同じくらいに空の青は綺麗だった。そして、暑い。今は夏だ。卒業に向けて話し合つこな、まだまだ早い。そう思つているのは僕だけなのか。

「崎速！ 崎速 歩！ なんかない？」

「別に……特に何もないけど」

寝起きで頭も回らない僕は、それだけを告げて、また進んでいく会議を眺める。卒業式に向けて、一体何をしようというのだろうか。今から決めたって、時間を余してしまつだけのようと思つ。けれど、そんなことはなかつた。

「卒業式は明後日だからなー！ 皆、気合を入れていくぞーー！」

は？ と、そう思ったのはやつぱり僕だけ。

善樹の言葉に天井に手を突き出して盛り上がつたクラスメイト達はそれぞれに教室から外へと散つていつた。

結局僕は、会議で何が決まつたのか分からず仕舞いのまま、善樹に手をひかれて教室から出た。

取りあえず、何をすればいいのだろうと悩んでいたら、何の意味はあるのか分からぬいけれども、校庭の木の根元を掘り返している善樹に、黄色のスコップを渡された。
僕も、一緒に掘ればいいのだろうか。

「タイムカプセル埋めるのは、定番だよな！」

「そうなの？」

「おう、俺の姉貴も兄貴も……父さんもやつたつて言つてた。何年かした後に掘り起こすんだつてよ」

「そうなの」

ザックザックと、木の陰の下、汗を流しながら掘り続ける僕と善樹。ほどなくして、地味な作業にあき始めた僕は、堪らず善樹に尋ねた。

「いつまで掘るの？」

「いつまでつて……そりやあ」

と、一呼吸間隔を置いた善樹は、口だけを歪ませるようにして笑う。

「人一人、入るくらいは掘るだらう? 普通さ」

その言葉に絶句する僕を置いて、善樹はまた、ザクザクと地面を掘りだす。人一人埋まるまでの穴を、このスコップで掘るのは無理だろうと思いながらも、僕は内心うろたえながら地面を掘り続ける。夏の卒業式。それが一体何からの卒業式なのか、あの頃の僕には全く分からなかつた。

「先生って、ここは学校卒業したんですね!」

「まあ。といつても、その頃は小学校しかなかつたから……」

一つの敷地に、小中高と、三つ学校を有する、私立奈津乃学園。^{しづつなつの}そこに今年新任教師としてやってきた男、崎速^{さきはや}歩^{あゆむ}は資料室で数人の生徒と談笑していた。文系教科担当の彼は、よくこの資料室で休憩している。それを知っている生徒が集まってきて、狭い資料室は、窓を開けてもなかなか涼しくなってくれない。

「十年くらい前の話だよ」

笑う歩に、男子生徒の一人が指を折つて、閃いたかのように笑う。

「じゃあ、先生、今、二十一くらいか！」

俺達と五・六歳しか違わないんだぜ、とはしゃいでいるのは、高校二年一組の**狛人** 夕威だ。

自分で切つているという髪は、中途半端な長さで適当さが伺える。明るい性格で軽薄に見えるのだが、想像よりもリーダーシップ性に富んでいる。自分でそれを出さないだけで。

と、会話を聞いていたもう一人が顔を上げて、窓の外を見ながらつぶやいた。

「二十一か……俺の兄さんと一緒にだ」

「お兄さん？　えっと……」

その少年は一年であるけれど、教えに行くクラスからは外れているので、歩は直ぐに名前を思い出すことができなかつた。

ワイシャツの襟をバサバサとさせながら言つた少年の言葉に、歩はああ、とうなづく事になる。心の底では、死にそうなほどに驚きながら。

「島垣。俺は島垣とうがき 善哉。兄さんは善樹よしづ 知つてます？」

「ああ、知つてる。同じクラスだつたよ。一緒に穴を掘つた……」

そう答えながら、歩は自分の想像が現実にならなかつたことに感謝した。

もし善哉が最後に、『知つてます？』ではなく『知つてますよね？』

と聞いてきたらば、間違いなく恐怖を表情に出してしまつただろ？

「穴？ あ、タイムカプセル埋めたってやつですね」

「そう」

「へえ、タイムカプセル。いいな！ 僕ひもやひめー！」

校庭の並木を見ながら、どに埋めよつかと考えてゐる夕威はふと表情を曇らせた。

「でも、よくテレビとかでやつてるよな…どに埋めたか分かんな
いってやつ」

「うん。残念な結果だよね」

「……何が残念な結果なわけ？」

宝探しの宝が見つけられなかつた当人達のような表情で会話をし
ていた夕威と善哉に、奥の方から分厚い本を抱えた少女が加わる。
先ほどまで、今日の社会科で出された宿題についてを調べていたの
だ。

セミロングの髪を今はピンで上げている。

その彼女に、夕威が窓枠に座つて呟つ。

「いいなあ、スカート。涼しそう」

「あら、穿いてみる？ 夕威ならさうと似合つわよ？」

「似合つんなら穿いてもいいかな」

テーブルの上に本を置いて椅子に腰かけた彼女は、大きく伸びを
する。夕威と同じく一組の生徒で、名前は馬屋技^{まやぎ}裕子^{ゆうこ}。
この三人は幼馴染で、毎日のようにこの資料室に顔を出す。とい
うより、入学当初からこの資料室に入り浸り、それがきっかけで歩

と彼らは仲良くなつた。

成績優秀な裕子と善哉。そして常に当たり障りない成績を通している夕威。この三人は面白くて仕方がない。これほど和氣あいあいとしているのに、三人が三人とも高校からの付き合いだといふ。それも、きっかけはこの資料室。

「あ、なんか言われたら似合ひ気がしてきた。まじで」

「穿く？」

「……おまえ、それはやめとけって」

風の通るそこで小ちく笑う夕威に、善哉が半眼になつて止める。ノートにペンを走らせながら言つ裕子は、視線を上げすらしていない。その光景を眺めながら、歩はほほえましく思つ。きっと、自分達もこいつなつていたのだろうとこつ、余りにも儚い想像をしながら。

に

卒業式は、真っ赤な色がよく似合つ。赤い色。その赤が余りにも鮮やかで、歩はしゃがみこんで口を手で押さえ、息を殺していた。そうしないと、自分も赤くなってしまふ。幸ちゃんは、すでに赤く着飾つて、かくれんぼをしている。順番に赤く着飾つていくクラスメイト。僕も赤くならないといけないんだろうか。赤は好きじゃない。

呼吸もまともにできない僕の目の前で、遂に善樹も赤色を身につけた。

ぱつと散つて、ぽたぽたと。奇麗だなんて思わない。

こんな卒業式は嫌だ。こんな卒業式なら、僕は卒業したくない。どうしてこんな事になつているんだろう。どうして？ どうして僕だけ違つんだ。僕が遅刻してきたから？ その遅刻だつて、僕のせいじゃないのに。どうして、僕だけ。僕だけ、残されるんだろう。

……僕は、僕はどうしたらいいんだ。赤に染まれない僕は……仲間外れになつて、そこから逃げた。

本日は珍しく、あの三人組はやつてこなかつた。理由は知つてい
るから心配にはならないが、やはりいないと寂しいものだ。熱い風
の吹き込む部屋で、引っ張りだしてきた書物を眺める歩は、視界を
埋め尽くす活字に意識を飛ばす。余計なことは考へない。

思い出してはいけないことを、思い出してしまうから。

この季節は特にそうだ。あの日のことを思い出す。置いて行かれ
た日のことを思い出す。卒業できなかつた自分を、心の隅で喜ぶ。
みんなは卒業したのに。夏の、あの日に。

「……今日は風が強いな」

油断したすきに、一気にページがめぐれていつた本をいつたん閉
じて、歩は窓を閉めようと、窓際まで歩いてゆく。そして、手を止
めた。

とある木の下に、小さな影を見つけたから。

少しツンツンした髪。つり気味の目。

一瞬、善樹だと思つてしまい、歩は眼を見開き、そして息を止め
た。

しかし、そんなことがあるはずはない。木の下にいたのは、善哉
の方だ。兄ではなくて、弟。

「……」

じつとその木の根元を見つめ、ほんやりと立つてゐる姿を、なぜ
か歩もぼんやりと眺めていた。善哉がそこで何を始めるのかなどと
は考えずに、ひたすらぼんやりとしていた。焦点は、善哉ではなく、
木の根元全体に向いていた。

タイムカプセル

善樹と一緒に、穴を掘つた木。忘れられない、幸ちゃんがかくれ
んぼをしていた木。

「おりょ？ センセ、何見てんの？」

その声にハツとして振り向くと、立っていたのは夕威だった。腕まくりをして、ズボンを膝あたりまでめくり上げてしまっている。彼はきょとんとして、歩と並ぶようにして窓から外を見る。そして同じように善哉を見つけて、声を張り上げた。

「ああっ！ いけねえんだ！ お前、ちゃんと仕事しろよーーー！」
「してんだろ！ 僕のどこみて仕事してないって言つんだよーーー！」
「ただ立つてるだけの仕事があるかあああーーー！」

確かに夕威の言つとおりだった。

今日は明日に控えた高校行事“花火大会”の準備で、各クラス張り切つて仕事に取り組んでいる…はずの時間だ。

善哉にしろ夕威にしろ、クラスの仕事をさぼつているところはここから確認できる時点で、明確なので、歩はあえてビビリ口も何も言わなかつた。やはり眞面目に作業しているのは裕子だけなんだろうか。

「はあ、疲れたあ。センセはなんか担当していないんすか？ ポスター編集とか」「ああ、僕は何も」「ふうん。なんか意外」

善哉に文句を言いながら、すっかり窓辺に腰を落ち着けてしまつた夕威は、半眼になりながら歩を見る。眞面目で少し気弱そうな教師として有名な彼だけに、こんな時に限つて面倒な仕事を押し付けられていそうだ。

けれども実際にそんなことはなく、彼だけ蚊帳の外のようだ、夕

威はどことなくいい気がしなかつた。一層のこと、巻き込んでやろうかとも思ったが、なぜかそれも気がひけた。彼の疲れたような雰囲気。どうしたのだろうか。

「センセってさ、実は結構人と関わるって苦手だつたりする?」

いきなり問われた一言に、歩は軽く面喰いながらも答えを探す。探しながらも、心はどこか別の何かを思つている。

「別に……意識するほど苦手じゃないよ。でも、人よりは敏感な方かな」

仲間に入れておいて、仲間外れにするなら、最初から放つておいてくれればいいのに。

ふとそう思った。別段、仲間外れにされている訳ではない。教師同士の付き合いも、生徒との付き合いも良好だ。ただ、歩には同じ年の友人と呼べる人間がない。

幼馴染という存在がない。

年上か、年下。彼にはその層の友人しかいないのだ。ともすれば、友人と呼べるかどうかがあやしい。

「そつか……じゃあ、センセって、本気になつたりしたことある?」「は?」

いきなりの質問に振り向くと、夕威はグイッと歩のネクタイをつかみ上げた。ネクタイピンが外れて、床に転がった音が響く。これにはさすがの歩も驚いたが、しかし振り払つことも、突き飛ばすこともない。

ただ受け身でいるだけだ。じつとして動かない。

「センセーち、本気になつたことないっしょ？ いつもどつかに
飛んでる」

「そつ」

「ボーッとしてても。やる事も言ひ事も正しいのに、なんか薄いん
だよね」

「そう」

「それってさ、生きてる意味あるの？」

「さあ」

思つていた。生きている意味などないのだと。けれども「にじにじ」
る以上、生きるしかないじゃないか。
人は、そう簡単に死ねないのだから。

「何の図よ、これ」

タイミングが良いのか悪いのか。夕威にネクタイをつかまれ、ぼんやりとされるがままになっていた歩に問うよつて、裕子が呆れたような表情で戸口に立っていた。彼女もさぼりに来たんだろうか。ことの発端を話すと、夕威が大変な目に合いそうな予感がするので、あえて「まかして」といたが、それにしたつて説明は難しい。手が滑つて…という苦しい言い訳しか出てこなかつた。

「まあ、そういう事にしておくけど……」

じついつ事にしておける彼女の精神は強靭だつた。

何事もなかつたよつて本棚の奥に消える裕子。歩が何となく視線を向けると、苦笑した夕威と目が合つ。思わず顔を見合わせた二人は、何となく笑つて、それから何事もなく窓の外へ視線をつつした。さすがに善哉の姿はない。

「何見てんの。あれ、あの木？」

いつの間に戻つてきたのか。抱えるよつて本を持った裕子が、歩と夕威の間から顔を出して、一人の見ていた木をさす。

「あの木のとこ、女の子の幽霊が出るつて
「え？」

事もなげに言われた言葉に、歩の表情が固まる。

少女の幽霊。そう言われて浮かぶのは、記憶の彼方にある女の子。

幸ちゃん。

「結構有名だよ。七不思議みたいになってるの。先生知らない？」

「……僕は、知らなかつたな。そんなんだ」

「へえ。センセが知らないって事は、最近出てきた噂なんだね。調べれば出でてくるかも……噂の原因」

窓の縁の狭い場所に座つている夕威は、何の危なげのなく体育座りの様な体制を取つて、面白そうに笑う。

「……」でひと押しすれば、彼はいつも簡単に落ちるだらう。三階から、土の地面へ。

「……」

す、と立ちあがつた歩は、手を夕威へと伸ばす。その手が肩に触れ、思った通りに夕威の体は斜めになつた。外側へ。

「わっ！？」

「危ない！」

しかし、彼が地面に衝突することはなかつた。歩に肩をつかまれ、一気に室内に引き戻される。夕威が顔をあげると、たぶん今の自分と同じ表情をしているであろう裕子と目が合つた。だから、とりあえずひきつった笑みを浮かべてみる。

「……はは、セーフ」

「せ、セーフじゃないわよ、馬鹿！」

「うう……痛え！」

ぱちん、という音が響いた。真上から真下へ。裕子の掌が夕威の

頭を叩いたのだ。止めるに止められなかつた歩は、両手をさ迷わせながら苦笑するしかない。

「結局全員サボつてんじやん」

丁度そこへ入ってきたのは善哉だ。授業はまだ終了していない。相変わらず暑そうにしている彼は、定位置の椅子に腰かけて、大きく息をつく。それから、裕子と夕威を指差して、それから力なくその手を下げた。

「なんか文句、言いたかつたけどいいや」

それすらも疲れたといつよつに机に突つ伏した彼に、夕威が向かい側に座りながら声をかける。

「おーー、どうしたんだよ。そんな疲れることあつたつけ?」

「お前にはなかつたな」

それはそうだ。クラスの手伝いもせずに、早々とここまで逃げてきた夕威には、疲れる要素など一つもない。裕子にしても、それほどまでに疲れることもないだろう。

ここに来るまでの間に、運悪くクラスメイトに仕事を頼まれてしまつたのだろう。明日の花火大会に、一番興味のなさそうな彼が、一番苦労をしている。なんともおかしなことだつた。

さわさわと木がなつて、漸くこの部屋にも風が入ってきた。涼しそうに目を細める裕子と、窓辺に走つて行つて大きく手を広げて風を受け止める夕威。そして机で本格的に眠ろうとしている善哉。胸の辺りが重い。この三人がとても羨ましく思え、歩が視線を落としたときだつた。

「先生、歩先生、時間ですよ？……あら、貴方達、こんなところ
で何してるの？ クラスのお仕事は？」

「あ、おばあちゃんセンセ」

軽く資料室の扉をノックしてから入ってきたのは、かなり年配の
保健室の先生だった。本名は杉本しの『すぎもと』。『おばあちゃん
先生』の愛称で親しまれている彼女は、誰に対しても優しく、包
容力のある人で、歩が小学生の時、だつた頃からこの学園に居た。彼
女いわく、学園の皆がやめさせてくれないそうだ。

彼女の声に時計を見た歩が、ああそうですね、と立ち上がり、杉
本に頭を下げて資料室から出てゆく。キヨトンとしている三人の生
徒に、彼女は、早く教室に戻りなさいね、とだけ言つて保健室に帰
つて行つた。

「センセ、どこ行くんだ？」
「ああ

呟いた夕威と、それに返した裕子。善哉は我関せずの様子で、机
に突つ伏して風に当たつている。

歩の居なくなつた資料室はただただ涼しくて、何となく空いてし
まつた空間がさびしいように思えた。それからチャイムが鳴るまで、
三人は適当に資料室を物色してから、教室に帰つて行つた。

車を適当に駐車場に止めた歩は、そこで一息置いてから車のドアを開ける。手には仕事道具の詰まったカバンと、かさかさと音を立てる白い袋。中には自分の名前と薬局名、そして服用する時間が印刷された、白い紙袋が入っている。

自分が思うよりも体の造りが弱かつたらしく、ほんの少しのプレッシャーにも、耐えることは出来なかつたようだ。元から弱いのだから、と杉本には言われてしまつたが。

部屋の鍵を取りだし、ロックにさし込もうとした時だ。気配を感じてそちらを向いた瞬間、歩は鍵から手を放し、持つていたものを全部落とした。

そしてとつとつと頭に浮かんだ言葉を、口にした。

「「」めん…」

酷く震えた声だった。許してくれる訳はなく、謝ることも出来ないと思つていた。だが、彼は笑つた。

「何がごめんだ。なんもしてねえだらうが、歩

忘れる訳はない。髪は伸びたし、雰囲気だつて変わつた。けども、面影がある。

「何もしなかつたから…」「めん、善樹」

「お前、昔より暗くなつたんじやねえ？　お前のせいじやねえよ。
分かつてゐる、嘘……多分、な」

やがて、自分を励ますよつた善樹に、懐かしさを感じながら、歩は
よつやく表情を緩めた。

よん

あまり色のない部屋だった。物珍しげに部屋を見回している善樹に、缶酎ハイを放った歩だつたが、善樹は受けとれずに落としたらしい。

つまむ物を探していた歩は、その瞬間をみれなかつたが。

「いきなり投げるなよー。」

「「めん」

笑いを含んだ声音に同じ様に返して、歩は卓に着く。受取りそこの缶酎ハイは、少し凹んだようだつたが、吹き出したりすることなく開けられたよつだつた。

「昔はジュークだったのになー。大人になつたぜ、俺達！」

「無駄に年だけとつた気がする」

「お前なあ……」

一口、酎ハイを飲んだ歩に、善樹は何とも言えない笑みで溜め息をついた。

「元気そうで良かった良かった」

そういう善樹も、と言おうとして、ふと歩は思つた。善樹はどうしてもここを知つてゐるのだろうと。誰かに、ましてや久しぶりに再会した善樹に、家の住所を教えたつもりはない。

「弟がさ。お前が先生やつてゐつたから。それで、へー、と

か思つてたら、病院で見掛けたさ

「病院？ 善樹、どこか悪いのか」

「あ？ いや、何て言おつ。大した事じやないんだけどな。良いくい
るんだよ、病院」

「……そつか

と、くら、と脳が揺れるような感覚を覚えた。まさか一口で酔つ
たのか。有り得ないと言えないのが恥ずかしいところだ。体調が優
れない時は特に。

「明日、卒業式だな」

と呟いた善樹に、歩は首を左右に振る。

「花火大会だよ…」

「いや、卒業式」

瞼が重くなつてきたが、善樹がいるのに寝るわけにもいかない。
普通ならここで無理矢理にでも、眠気を退けられるはずなのに、今
回はそうはならなかつた。

目を閉じそうになつたつゝろで、善樹に軽く肩を掴まれる。けれ
ども、薄く目を開けるのが精一杯だつた。

「おい、薬。薬、飲めよ。相変わらず、弱つちいんだから」

「……ああ」

返事はしながら、行動に移せない。仕様がねえなあ、と呟きなが
ら善樹がコップに水を入れて持つてくれた。

歩はかなりの気力を振り絞つて、何とか薬を飲み下す。

「明日、タイムカプセル、見付けに行こう。俺、後から行くから」「分かつた……」

半分寝ながら返した歩。善樹は慌てるそぶりも見せずに、呟いた。

「卒業、出来るといいな」

だから、卒業式じゃないって……と言つ歩の思いは、結局、声にならなかつた。

花火大会は夕方近くになつてから始まる。けれども、午後一時ころから、各部活動の屋台が出始めるので、気分は学園祭だ。それは夕威にしても裕子にしても例外ではない。善哉だけが我関せずの状態だ。

だから、今、歩と二人で資料室にいる。

「善哉はいかないのか、売店とか
「俺は別に……腹減つてないし」

つまりなそこに本を眺めながら、半まどろみながら、善哉は歩に返す。

その素つ氣なさに微笑んで、歩は本のページを捲る。

「あんまり似てないな、君と善樹」

「そうつすか?」

「うん。善樹は…夕威みたいな感じだったから」

「うわ、ウゼ」

「そんな事を言つもんじゃない」

顔をしかめた善哉に苦笑を向けて、歩は、ああ、と、善哉に向つ。

「そつにえは、昨日、善樹が家に来たんだ。思つたより元気もつでよかつたよ」

「は？ 兄貴が？」

「そう。病院にいたつて言つんだけど……どうか悪いの？」

「……あの」

と、善哉が口を開きかけたタイミングで、夕威が雪崩の「」とく、資料室に駆けてきた。

「たこ焼きとお好み焼き、どっちがいい…？」

「何だよ…」

「フランクフルトと焼き鳥だつたらどうひつ…？」

「夕威、少し落ち着いたらどうだい」

「死活問題なんだ！ アイスとかき氷、取るなりひつすみゆる？」

なんだかんだで、下げて居る袋と手に、全てを持つて居る夕威したが、善哉は深く溜め息をついてから答えた。

「たこ焼き鳥塩アイス」

「じゃあ半分あげる！」

「……焼き鳥、塩じやないなら、いらないから」

無理矢理渡された善哉は、焼き鳥だけ突き返して、たこ焼きとアイスを受け取る。歩も、いらないと言つたのに、善哉が受け取らな

かつた焼き鳥を渡された。

「一応、飲食禁止なんだけど…」

「いっていいって！ ばれないばれない」

「先生、校則違反ですー」

「お前もだろー！」

アイスを食べながら語り書き哉にも、惜し氣もなく校則を破る夕威にも困つたものだが、それを許容してしまつ自分にも問題がある。

「笑つてないで注意した方がいいですよ、先生。…ついでだけは例外で」

「裕子、ナイス！！」

「ははっ」

裕子も裕子で、綿飴片手にやつて来た。

「はい。先生に渡してつて」

「どうも……えっと、綿飴つて何部だっけ」

「手芸部。モテるね、先生」

綿飴は甘いし、直ぐに溶けるから食べやすい。少しづつ口に含んで溶かしながら、歩はいつも三人を見つめていた。

自分でもいい加減、呆れてしまう。未練がましく過去にしがみ付くようにして、羨ましく思つてしまつ。

生徒達が楽しんでいる今を、歩達は永遠に逃してしまつていた。一緒に楽しく過ごす時間が、こんなに大切ななんて。

『しょーらーはカメンライダーになる』

『役者さん?』

『いや、カメンライダー』

『無理だつて……』

『じゃあね、わたし、動物屋さん』

『僕…どうしようかな』

と言つ会話を、病室でしていた。学校にいるか、病院にいるかしかしていなかつた氣がする。

思えば、酷い小学校時代だつたけれども、あの時は、そんなことは考えなかつた。善樹がいて、幸ちゃんがいて、なんだか色々な話をしているだけで良かつた。

それだけで、良かつたのに。

「すみません、今日は遅れて行きますので……」

そう言つて、母親が玄関先の電話を切つた。学校へ電話したんだ
るわ。

「ランドセルは？ 忘れ物、無い？」

「無い」

手紙と小さな石こりの入つた封筒が確り入つてゐるのを確認して、
歩は鞄の蓋を閉めた。

遅刻しては行くが、今日は卒業式だ。タイムカプセルの中身は忘
れてはいけない。

「シートベルトしてね
「分かってるよー」

学校へ遅刻するのと、行きたくもない病院へ行かなければならな
い苛立ちが、母親への態度を邪険なものにする。しかし、彼女は氣
にした様子もなく車を発進させた。

大通りに出て暫くしてから、母親が話を切り出す。

「聞いたわよ。幸ちゃん、転校しちゃうんですね」

その言葉が、胸に刺さつた。転校。六年生で、もう少しで卒業す
ると語りきの転校だ。

当事者の幸ちゃんも、喜樹も歩も、ショックを受けたし、嫌だつ
た。けれど、現実を変えることは出来ない。

だから、今日、卒業式をするのだ。

幸ちゃんの転校の事も、歩は病院へ行っていたせいで、他のクラブメイトより、知るのが遅くなつた。こんなものしか用意できなかつたけど、と思いながら入れたのが、いつか拾つた綺麗な小石だ。

「はい、着いたわよ。降りて降りて」

「うん……わっ！」

「ちょっと、大丈夫！？」

「う、うん」

車から降りると、足を引っ掛けた歩は、地面に膝をついてしまつた。大丈夫だと言いながらも、膝からは血が出ている。

慌てた母親に病院へ担ぎこまれながら、歩は意外に冷静だつた。

「気を付けなきゃ駄目だよ、歩くん」

「はーい」

只の消毒だけでなく、何度も薬をつけたり拭いたりされながら、足には漸く包帯が巻かれるところだつた。

歩は、免疫力が極めて弱い子供なのだ。生活に支障は無いが、怪我や風邪にはめっぽう弱い。

定期的に病院で検査を受けて、異常が無いかを確認しながら生活をしないと、知らぬ間に手遅れになつている可能性すらあるという。当時の歩には、事の重大さが、あまり理解出来なかつたが。

「怪我の方は大丈夫ですね。体にも異常はありませんでした

「そうですか…」

来るたびに同じことを言われ、母親も同じ様にほつと息を漏らす。

歩にとつては不思議だった。

それほど危ないのだと分かっていないから。

「はー、良かった！ 歩、晩御飯、何がいい？」

「んー。ハンバーグがいい。チーズのつてるの」

「じゃあ、お母さん、頑張るからね！」

「うん！」

そうして、学校の前で下ろして貰つて、手を降つて別れた後。教室に行つてみると、誰もいなくて、机の上に紙が乗つっていた。

『さきにいつてる』

後半、少しよれよれになつていてる文字は、喜樹が書いたものだ。歩の到着が遅いので、先に校庭の隅の木の所に行つてしまつたんだろう。

封筒を持つて急いで走つていたら、膝が痛くなってきた。少しイライラとしながら、ちょこちょこと歩いて、校庭に出る。

その時、裏門から入つてきた人を見た。

何か持つてゐる。普通に近所のお兄さん、みたいな人だった。けど、手には普通、持つて歩かない物を持つてゐる。

少し校庭を見回して、木下に集まつたクラスメイト達を見つけた様だつた。そこからの展開は速い。

歩きながら走るようにして、スタスターと近寄つたかと思うと、手当たり次第に手に持つたもので切りつける。

「わ、あつー！」

真つ赤なものが、校庭が変な色に変わる。

動けなくなつた僕の目の前で、幸ちゃんがびっくりした顔のままで、僕と喜樹の掘つた穴に落ちた。持つてたのは、カプセル。

そう、幸ちゃんが落ちたのに、そのお兄さんは、積み上がりっていた土を穴に蹴り入れる。足なのに、物凄い量の土が、ざらざらと流れしていく。

その人の足を蹴り飛ばし、体当たりをした喜樹。けど、直ぐに突き飛ばされて、お腹のどこかを、刺されて。

先生。先生！！

呪文みたいに唱えても、先生は来てくれない。そして、全部が終わってしまった後に、漸く、漸く、保健室の先生がやって来て、先生達がやって来て。

「……」

ぼんやりと立つたまま。歩は封筒を握り締めていた。

ドオン…バラバラ。

いきなり視界が明るくなったのに驚いて目を開けると、薄暗い資料室だった。明るさは、外の花火だ。

寝てしまったのか、とほんやりと手を擦ると、何かが視界の端に移る。

キヤハハッという笑い声と走る足音が響き、歩は溜め息をつく。

小学生だろう。花火を見に来た生徒の家族に違いない。

「あ、センセ、起きた」

「ホントだ」

パチン、と電気をつけられ、歩は手を細める。居たのは夕威と裕子だ。

「あれ… 嘉哉くんは」

寝惚けた頭で問つと、裕子が缶ジュースを歩に渡す。

「嘉哉なら病院に行くって……お兄さんのと」だと思つけど

「……そう

やつぱりどこか悪くしているのか、と思いながら、歩は受け取ったものをテーブルに置く。

「センセ、大丈夫か」

「え？」

「スッゲー、疲れた顔してる」

「ああ、大丈夫」

寝起きだから、と笑つてみるが、どこか釈然としないものがある。時計を見ると、八時を過ぎていた。花火大会は、八時半に終る。

「ぎりぎり。あ、先生、今晚和

「うん」

走ってきたのか、少し汗をかいている喜哉に、夕威がジュースを放つた。炭酸だ。

「……先生、まだ半分寝てないか」

「さつき起きたとこ……だと思つ」

「そこそこと言つ裕子に話しかけた喜哉。それを聞きながら、歩はぼんやりとしていた。眠気が中々覚めない。

「良い時間だな……これ、最後かな」

窓辺に三人集まつて、一番大きな花火を上がるのを見つめている。あれが上がつたら、今日の学校は終りだな、と思いながら、生徒達の後ろに立つた歩。

笛のような高い音が空に上がつて、それから、弾けた。弾けた瞬間、歩は視線を落としていた。

木の下に、誰かが立っていた。

るく

花火が散つて、光が消えて、辺りが暗くなる。

「……え」

そう言つたのは夕威だ。何に驚いているのか分からぬ様子で、歩や喜哉、裕子が彼を向く。

夕威自身はとても困惑しているようだ。月明かりの下でも分かる。

「え、な、なあ、電氣……電氣、点けたよな？」

そうだ。電氣。

「ホントね……誰か消したのかしら」

と近くにあつたボタンを押しても、何も反応しない。停電だろつか、と窓の外を見てみると、真っ暗だ。

「停電じゃね」

と、喜哉が振り返ると、夕威の顔が真っ青だ。いつもふざけた様にしている姿しか見ないので、驚きの具合も違う。

「おい……大丈夫か？」

「だ、駄目、俺つ、駄目なんだよ、いつのー。」

「夕威？ 何が駄目なの」

耳を塞ぐようにしてしゃがみこんだ夕威に、裕子が歩み寄る。

具合いでも悪いのだろうかと、歩と喜哉も心配そうに見守るなか、夕威は震える声で訴えた。

「停電じゃない、これ、絶対停電じゃない。つづかおかしいじゃん、誰もいないとか……見た？ 校庭も、誰もいないし。何もないし！」
「落ち着いて、夕威」

夕威の言葉に、校庭を見に窓辺に行つた裕子の代わりに、歩が夕威の背中をさする。

粗鄙怖いのだろう。顔色もそつだが、体のが酷く冷たくなつている。

「うわ……」

口に手を当てて、後退さつた先でぶつかつた椅子に、裕子は尻餅をつくよつて座り込む。

喜哉はジッと窓の外を見て、うろたえる様子もなく振り返つた。

「どうする？」

「どうするって……」

「俺も分かんねえけど。ここに留まつて、どうもなんねえだら」

冷静な喜哉に、裕子も夕威も反応を返せない。ただ歩には心あたりがある。

「……懐中電灯、探してくる。確か職員室にあつたはずだから」

立ち上がつた歩に着いて行こうとした喜哉だが、その足を夕威に掴まれて止まる。

少し眉を寄せて彼をみやると、夕威は一層、手に力を込めた。

「嘉哉は、駄目だ」
「はあ？」

苛立たしげに嘉哉が言つた瞬間、資料室の戸が、静かに閉められた。

本当に真っ暗だった。壁に手を当てながら何とか階段を降りきつた歩は、職員室の戸に、指を這わせる。取つ手を見付けて、いざ開こととした時だ。

戸が勝手に開いた。

え、と、戸から手を離すと向こう側驚いたのか、声こぼれで「何かを落とした。

「あ、あの…」

無言でいるのもどうかと思い、声をかけると、相手は意外や意外、知り合いだった。

「あ、歩先生？」
「杉元先生、ですか」「ええ」

落としてしまった懐中電灯を拾いあげた彼女は、それをつけて歩に向ける。向けられた歩は、田を細めて少し笑つ。

「よかつた……他に先生がいて。あ、懐中電灯はまだありますか」「ええ、後、三つ」

杉元に連れられ、懐中電灯を二つ手にした歩に、彼女は首を捻る。

「一つで十分ではない?」「いえ、上に生徒が……」「まあ」

驚いた様子の杉元。だが、彼女が驚いたのは、生徒が上にいると言つことについてで、今、起こっている怪現象についてではない。そしてそれは歩も同じだ。

「今晚和一、お一人さん」「善樹」

軽い調子で職員室に入ってきたのは、後から行くと言つていた善樹。彼は懐中電灯の光を見てここまで来たらしい。

「歩、行こうぜ。タイムカプセル、掘りに」「ああ。……杉元先生」

真剣な眼差しで背を向け、廊下に出ていった善樹を追い掛けるよう、てり、数歩進んだ歩が、気付いたように引き返す。そして懐中電灯を杉元に渡した。

「三階の資料室へ、監禁すると思こましかり。お願ひしまや」

声はなく頷いた杉元に礼をして、歩は今度こそ善樹を追い掛けた。

資料室では、相変わらず縮こまつてこいる夕威に、善哉が苛々している。裕子は何かを考えているようだが、混乱して考えがまとまらずにいるようだ。

「夕威

「……」

もう何度目か。歩が行つてから何度も声をかけても、うつ向いた夕威は答えない。

もう嫌だ、とこう苛立ちを吐き出すような溜め息を、善哉がついた瞬間だ。

「ンンン」と扉を叩く音がして、三人が顔を上げる。一番扉に近いのは善哉だが、何と無く、開けたくなかつた。

「開けないで、マジで」

絞り出すよつた夕威の声に、怪訝そうな表情で善哉が振りかえる。

「先生なら、ノックしない」

言つてゐる間にも、もつ一度ノックがあつた。待つ限り、ノックが続く。

「も、もしかしたら、別の人かも。ほら先生に言われて來た人とか

そう言つて、走るように扉に近付いて、取つ手に手をかけた裕子。瞬間、善哉の耳にクスクスという小さな声が聞え、夕威はuzzと聞こえていた笑い声が、すぐ耳もとでした。

夕威と善哉の声が重なる。

「開けるな！」

「え？」

がらりと開いた扉の向こうは、ただ真つ暗だつた。

「え、ちょっと…開けるなつて？」

「いや」

氣のせいか、と頭を搔いた善哉と裕子の間を、フラツと夕威が通る。

おー、と伸ばした善哉の手は、スルリと避けられてしまった。さらに追い掛けようと裕子が教室から出た時、夕威が行つたのは別の方向から、懷中電灯の光がさした。

「あら、裕子ちゃん？」

「オバアチャン先生！」

「善哉くんも……ああ、善哉くん」

「え」

次に言われた言葉に、善哉は眉を潜めた。

「善樹くん、今年も来てるわよ。はい、懐中電灯」

「どうも。えっと、兄貴が……？」

「毎年だけどね、来てくれるわよ花火大会」

笑顔で言う彼女に、善哉と裕子の表情がおかしなものになる。

「善哉のお兄さんって……」

「ああ、俺の兄貴は」

どうしたの？ と言った表情の杉元。善哉の口から事實を聞いた瞬間、彼女の顔色は真っ青になった

なな

「おい、死にそうじゃねえか、歩
「大袈裟だな…少し疲れてるだけだよ」

玄関にたどり着いた所で、急に座り込んだ歩に、善樹が言つ。

「薬、飲んだか」

首を左右に振った彼に、善樹は深く溜め息をついた。

「飲めよ。今からでも……ほら、立て

「持つてきてない」

「じゃあ水だけでも飲んどけ」

校舎内に戻るよつ、外にある水のみ場の方が近いと、善樹は歩に肩を貸してそこまで歩かせる。蛇口を捻つてやつて、ほら、と近付けた。

少々不服そうだが、歩は水を口に含み、むせた。

「おい」

「気管に入ったんだよ…げほっ」

最後に口をゆすぐと、そのまましゃがみこむ。

「休ませてくれ。調子が悪いみたいだ
「はいはい」

毎間に居眠りしてしまつた辺りから、分かつていて。今日は、と

「もういいのか？」
「ああ。大丈夫」

良くなさそうだ、と思いながらも、善樹は肩を貸す。フランフランと目的の木のもとへ行くと、そこには先客が。

「夕威？」

無心でザクザク、ザクザクと土を掘っているのは夕威だった。自分に土が降ってくるのも構わずに、豪快に掘っている。

「お前ら……そいつから離れるよー。」「善樹？」

がし、と夕威の肩を掴んだ善樹に驚いた歩だつたが、次の瞬間、更に驚いた。

「今年は邪魔、させない」

「うつー！？」

夕威が善樹の手を掴み返した瞬間、支えが無くなつて歩が土の上に膝をつく。善樹が。善樹が、消えた。

「……」

暫く呆然としていた歩は、立ち上がって、穴を堀続ける夕威の手を止めさせる。

何がなんだかは分からない。分かないが、ただ嫌だった。自分以外の誰かが掘っているのが、嫌だった。

「遅いよ、センセ」「タ……ぐつ……」

笑つて振り返つた夕威にほつとしたのも束の間。歩は強い衝撃に土埃をあげて地面に倒れていた。
痛みは遅れてやってくる。

「遅いよ…痛かったんだよ、センセ」

スコップか。そう思つたのは、三発目をくらつた後だった。

「怖くてね、ずっと呼んでたの…来てくれなかつたよ、センセは」
何度も何度も殴られながら、歩は思つ。僕だつて、そつだつたさ、
けども口を開く気力はない。

「何やつてんだ、夕威!!」

校舎一階の窓から飛び出してきた善哉が、夕威にとびかかる。押し倒された夕威は。

「善樹…」

そう、言つた。しかし、善哉は怒鳴りかえす。

「兄貴は病院だ！ 居る別けねえだろ!!」

「びょう、いん？」

裕子と杉元に助けられ、何とか体を起こした歩に、裕子が言つた。

「善哉のお兄さん、植物人間、なんだつて」「え」

植物人間。いや、だつて会つたじやないか。昨日も今日も。そう思つて杉元を見ると、彼女は、頷いた。

「彼は毎年來ていたわ。ここに。無差別殺人事件があつた日」「……そつか」

ふと浮かんできたのは、孤独感。だが、歩は顔をあげて、よろよろと、善哉も夕威も無視して、中途半端に掘られた穴を覗き込んで、言つた。

「皆、分かんないかな…僕だよ」

「先生？」

歩に近付こうとする裕子に、杉元が止めるように首を左右にふる。急に静かになつた夕威を不思議に思いながら、善哉も顔をそちらに向けた。

その目が、見開かれる。

「……歩くん？」
「うん」

穴を挟んで向ひの側。小さな箱を抱えた女の子が立つていた。

「僕だよ」

「うう、どうかともなく、ワラワラと少年少女が集まってきた。口々に、『歩だ』とか『遅刻だよ』なんていいながら。

「じめんね、凄い遅刻だね」

「先に行こうとしたの止めんの、大変だつたんだぜ……痛つてえ」

手首を振つて戻つてきた喜樹に向こう側から『やうだつたんだ』『じめーん』なんていう声が上がる。

「兄貴」

「おお、わっしきぶり、喜哉」

夕威から離れて、歩いてきた喜哉が、喜樹の腕に触れようと手を伸ばす。しかし、それは当然の様に叶わなかった。

歩は、目を細めて、自分の手を見る。そして、自分が喜樹に触れられた理由を考えた。

「どんまいだな。お前は長生きするぞ」

そう言つて、多分頭を撫でようとしたんだろう。手をあげて、そこで止まる。やるせなく苦笑したかと思うと、喜樹は、穴飛び越して、幸ちゃん達のいる方へと移つた。

「俺は「ひ」の側だ。どうするよ、歩」

「僕は……」

「歩くん」

悩んでころぶに、幸ちゃんが小さな掌を伸ばす。笑顔の幸ちゃん

と、ただどうするかを見ているだけの喜樹。歩が手を伸ばそうとした時だ。

「せ、センセ…… 駄目！ うわ！」
「夕威！」

こきなり起き上がり、歩を止めよつと走り出した夕威が、体勢を崩して倒れこむ。逆に手を伸ばして、夕威を受け止めた歩に、幸ちやんは手を引っ込めた。

喜樹は小さく笑う。

「分かってるじゃないか、お前。…… 喜哉」
「何だよ」
「幽さん達に言つてくれよ。訳分かんない管とかを、外してくれつて」
「自分で言え」
「すねるなよ。言えねえから頼んでるんだ。頼むよ」
「……」

うん、と言えるわけがない。これは殺してくれと言つてこのと
同じだ。
けど、歩は止めない。むしろ逆だ。外してやつてくれと言つだ
う。

「…歩もな。もひょいだけ待つてやるよ」
「うん。これ

微妙な顔で笑った喜樹。頷いた歩は、幸ちやんに白い封筒を渡す。それを受けとる為に伸ばされた手は、封筒を掴めぬまま消えて、同

時に世界は明るさを取り戻す。

急に力が抜けた歩は、そのまま流れに任せて田を閉じる。
しわの刻まれた封筒は、小さな亡骸と箱の上に落ちて、ただじつ
と、沈むように鎮座していた。

夏休みの中頃。資料室で休んでいるのは、生徒一人と教師一人。

「はあ…ねえ、センセ。保健室戻らなくていいの」

「今日は誰もいないわよ。あなた達以外」

「ううなんだ…と呟いた夕威には、いつもの元気はない。原因は歩にある。

「おはようついせーん…って、あれ、杉元先生」

「おはようついじやここます。どうだったの、お兄さんは」

「ああ、なんだかんだで、維持装置外してきました」

親はやつぱり嫌だつたみたいでしたけど、と喜哉は椅子に座る。
さわさわと言う木の囁き。

木の根本に、もう穴はない。タイムカプセルもなければ、小さな
女の子の遺体もない。

「あの後、大変だったわよね。先生は倒れちゃうし」

「……」

曇った夕威の表情に、裕子が、あつと言葉を詰まらせた。そして
喜哉が溜め息をついた。

「お前のせいじやねえって言つてただろ。先生が言つてんだから気に
にするなよ」

「…だけどさ、殴ったのは俺だし」

「お前じやなかつた」

抑えた時の、あの冷たさも、感じた雰囲気も。

「お前なもんか」

視線を下へそらした喜哉。

「先生がさ、親父とお袋に『喜び』てくれたんだよ。兄貴の事。……皆で楽しくやりますから、だつてさ」

「皆で楽しくやつまつて……」

引っ越しかるもの言ひに、喜哉と裕子は匂を寄せる。それに答えたのは夕威だ。

「夏が終わる前に、センセの寿命は無くなるんだ」

「…は？」

それつきり口をつけんだ夕威を引き継ぎよひに、杉元が言ひ。

「もとから体の弱い子だったのよ。その頃から、長生きは出来ないのでつて言う話でね」

正直、いつじめた会えるとは思つてもみなかつたそつだ。

「十何年も前にあつた、無差別殺人事件の目撃者が歩先生だったのね。でも、体が弱い子だから、びっくりしちやつて、体調くずしちやつて」

入院してしまつたそつだ。一時は昏睡状態にすらなるほど。そして逃げていつた犯人は、そのまま逃げきつたとか。

「それからよ。毎年その日になると、学校から誰もいなくなるの」「初めてじゃなかつたんですか」

驚いているのは喜哉と裕子。夕威は目を細めているだけだ。

「俺、知つてた。だから、毎年休んでたんだ」「じゃあ、今年は何で…」「センセが、いたから。死にそつだなって思つて。俺、結構センセの事、好きだつたし」

そうね、と頷いた杉元は言つ。

「体は弱い子だったの。でもね、皆、彼のことが好きだつたわ。取り分け、喜樹くんと幸ちゃんね。一緒に遊んでたわ」「……」

小さく溜め息をついた喜哉に、慌てた様子で杉元が言つ。

「『めんなさいね、こんな話』
『いや、いいんですけどね』

どれだけ、仲が良かつたのかを考えた。死ぬ」とに恐れを感じない程、仲が良いとはどういう感じなのだろうと。

「先生の体、そこまで悪かったなんて…ねえ」「ああ」

花火大会のあと、大騒ぎになつた場所が一つある。一つは当然、あの木の下。もう一つは、外の水のみ場だ。血まみれだったそうで。

「本当は入院してなくちゃいけなかつたのよ。でもね、歩先生は、もう駄目ですから学校に行きますつて。我が儘言つ小学生じやないでしょうつて、言い返したんだけど」「…………

僕、小学生の時に我が儘言わなかつたので。と、更に返されてしまつたといつ。

「センセははずつと小学生だつたんだよ。センセには過去と今しかなかつた」「…………」

「喜哉のお兄さんも一緒だよ。僕らと違つた」

首を捻る喜哉に、夕威は目を伏せて言つた。

「未来に何もなかつたんだよ。センセ達には」

歩には生きる時間じたいがなくて、喜樹には何も出来ない時間が永遠に続くだけ。

「昔より楽しいことがないから、生きよつとも思えない……センセ、ちょっと嬉しそうだつたし」「…………

病院に三人揃つてお見舞いに行つたとき。警察の人へ返してもらつたというタイムカプセルを傍らに置いて、歩は笑つた。
疲れた感じはなくて、普通ならこう笑うだろう、という顔で。

「ああ、なんか、今日行つたら、車椅子だつた。歩くの大変だからつてさ」「…………

でも、やっぱり笑っていた。本当にただの笑顔だった。達成感があるような、漸く「ゴールにたどり着ける」と言つよつな。喜哉達にとっては、ただ切なさだけが残る笑顔で。

「……これでいいのかなあ」

亥いた裕子に答えたのは、夕威だった。妙に自信があるようではつきりと。

「いいんだよ。センセは寿命まで生きるんだから」

あそこで女の子の手を取つていたら、そこで死んでしまっていたといづ。

「いいんだろ? な、先生はわ」

亥いた喜哉はぼんやりと、あの木の下を眺めていた。

個室の部屋で、歩は古びた缶箱の蓋を開けた。

「開けちまうのか」

「…開けるだけ。中は見ない」

「開ける意味ないだろ」

音もなく入ってきて、椅子に腰かけた喜樹に、歩は笑ったまま、缶の中に手紙を放り込んだ。

「まだ入れてなかつたのか」

「うん…それで、どうなつたの」

「…………どうつて、お前。そろそろあのベッドともおさらばだな。喜

哉のヤツ、薄情なんだぜ？ わざわざと学校いきやがつて」

「見たくないんだよ。わづとな。毎日、来てくれてたんだろ」

缶の蓋を開めて、ボードの上に置こうから、喜樹を向く。

喜樹は坦々気に頷いた。

「ああ。学校の事、話してくれんだ。毎日毎日。楽しそうだつたけど…俺には出来ない事だつたからな。話より、アイツが来てくれるつ通のが嬉しかつたな。親父達は俺のせいで働きっぱだつたし」

申し訳なかつたな。と苦笑した喜樹を歩が小突いた。

「生かしてもらつたんだ。申し訳なかつた、は違う
「そうだな」

嬉しそうにする喜樹が、不意に胸を抑える。曇つた表情に、歩も
ああ、と語る。

「苦しいな、やつぱり」

「…………だらうな。死ぬんだから」

「はは、直球過ぎだ」

小さく笑う喜樹が、歩に手を伸ばす。その手は歩の腕に、なんなく触れた。

「僕だつて直ぐにいくんだ。触れたつて不思議じゃない」

「先に行つてる…早くこいよ」

「普通は逆のことと言つんだけどな

「へへ」

と、痩せ我慢の様に笑つたのが最後。瞬きをした瞬間に、喜樹はいなくなっていた。

「……先に行つてる、か」

眩いた歩は、ぼんやりと窓の外を見る。蒼い空だ。
そうしながら思った。

この空が朱になつて、もう車椅子なんかにも乗らなくなつた頃、今みたいに疲れて眠つてしまつた後。

皆でこのタイムカプセルを開けるんだ。

箱の中にしまつた、大事な大事な、僕らの未来を。

大きく息を吸つて、田を閉じる。近い内に来るだろう、その時を待ち愛しく思うのは間違つているのだろうか。

「……」

田を閉じた歩を起しやつとする者はいなく、ただ、風が彼を撫でるだけだった。

ゆづくつとゆづくつと、深く眠りてしまつたのを誇つよつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8126e/>

夏の卒業式

2010年12月3日14時19分発行